第11回企画展

遷善館

1 扁額「遷善館」榎本善之助家所蔵

久喜市公文書館

平成11年8月24日(火)～10月3日(日)

(8月28日・9月4日・11日・15日・18日・23日・25日・10月2日は休館)

「遷善館」を開催するにあたって

当館は、平成5年10月に開館して以来、「歴史資料として重要な市の公文書その他の記録」を保存し、これらを計画的に整理・公開していくことを主な業務としております。

この公開は、実際に利用者の皆様が手にとって閲覧していただくことを原則としておりますが、その一方で公文書館をたくさんの市民の皆様にご利用いただくため、年2回の企画展を催し、公文書館資料の紹介にも努めています。

11回目を迎える今回は、「遷善館」を開催することにいたしました。

「遷善館」は、享和3年(1803)に、設立された村民のための教育機関です。江戸時代後期になりますと、社会的要請により一般庶民の間にも、教育活動が普及してきました。その教育機関としましては、藩学・郷学・私塾・寺子屋があり、郷学は、武士のための藩学と、一般庶民のための寺子屋の中間に位置する官民一体の教育機関でした。久喜における郷学設立の要望は、米津(よねきつ)氏の支配の頃よりありましたが、実現せず、代官早川八郎左衛門の着任によってはじめて達成されました。

遷善館に関する資料は多くありませんが、その中から遷善館の設立に大きく寄与しました代官早川八郎左衛門に関する資料を始め、当時の遷善館についての資料、遷善館の教授陣の中で最も有名な亀田鵬斎に関する資料についても紹介することにいたしました。

遷善館がいつまで続いたのかは、明らかではありませんが、現在でも、市内の小・中学校の中には、校歌の歌詞に遷善館が出てきます。今日でも語り続いている久喜市の教育の原点ともいえる遷善館について知っていただくとともに、この展示を観覧された皆様の中から、さらなる調査・研究が進められ、過去の歴史が少しでも明らかになることをご期待申し上げます。

最後になりますが、今回の展示を行うにあたりまして貴重な資料を提供していただきました関係者の方々に心からお礼申し上げます。

平成11年8月

久喜市公文書館長

※　表紙の「遷善館」の扁額は、幕府の佑筆屋代弘賢(やしろひろかた)の筆によるもので、遷善館の玄関上に高く掲げられていたといわれています。

主な参考文献

① 埼玉県教育委員会『埼玉県教育史』第二巻（1968）

② 永山卯三郎『早川代官』（嶽南堂書房・1971）

③ 村山吉廣・堀間善範「亀田鵬斎　遷善館記」（『中国古典研究』24・1979）

④ 杉村英治『亀田鵬斎』（三樹書房・1981）

⑤ 杉村英治『亀田鵬斎の世界』（三樹書房・1985）

Ⅰ　遷善館の設立

(1) 遷善館とは

遷善館は、享和３年(1803)に、久喜郷に村民のための教育機関として建てられた郷学です。

江戸時代後期になると教育活動は、社会的要請により一般の庶民の間にも広がってきました。その教育機関として、藩学、郷学、私塾、寺子屋がありました。

郷学は、武士のための藩学と、一般庶民のための寺子屋の中間に位置する官民一体となった教育機関です。郷学の設立・経営の主体は、藩主、代官、さらに民間の有志でした。民間の有志が設立した場合でも、幕府や藩の保護や管理を受けていました。寺子屋の場合、開くも閉じるも教師一人の思惑任せでしたが、郷学の場合は、役所の許可が必要でした。また、学校の敷地や学田の租税の免除や、経費の一部分を藩から支給されるなどの保護もありました。

久喜郷における郷学の設立についての要望は、すでに米津氏が領主の時代からありましたが、当時は実現せず、早川代官の着任によってはじめて達成されました。

埼玉県域に設立された郷学は、久喜の遷善館のほかに、岩槻藩の児玉南柯(こだまなんか)(1746～1830)により、文化８年(1811)に設立された戯穀堂(せんこくどう)がありました。

『新編武蔵風土記稿』の「久喜町」のところに、

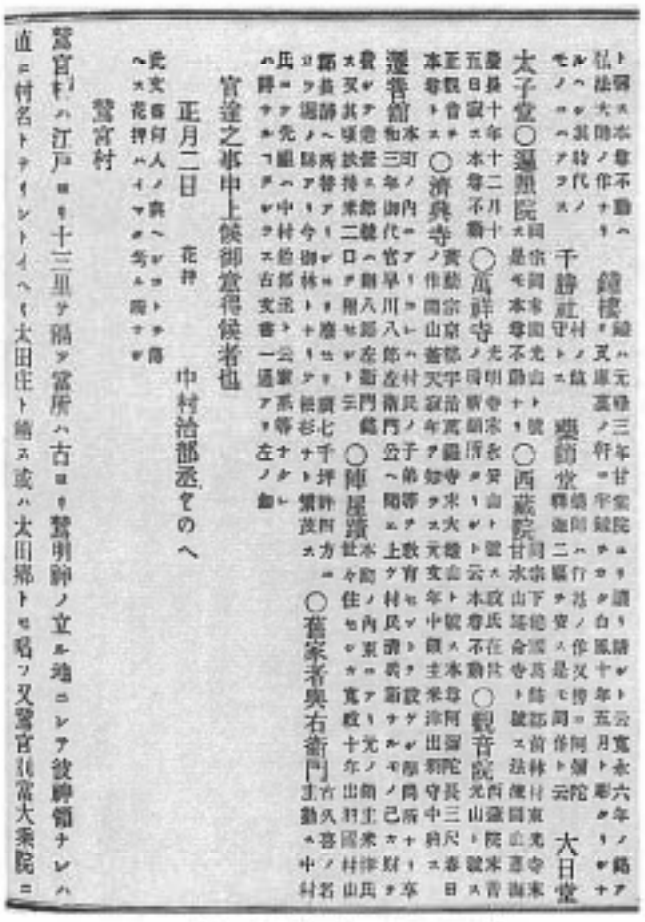
遷善館は村民のための教育機関で、享和３年(1803)に設立されたこと。

代官早川八郎左衛門が設立のために力を尽したこと。

村民清兵衛が財を出したこと。

八郎左衛門によって遷善館と名づけられたこと。

等が書かれています。



2　『新編武蔵風土記稿』
国立公文書館所蔵

(2) 協力者　井上清兵衛

『新編武蔵風土記稿』に、村民清兵衛が、己が財を費やして遷善館を造営したと記されています。

明治年間、久喜尋常小学校の校長鈴木藤之助氏が村民清兵衛は井上清兵衛であることを明らかにしています。井上清兵衛は、宝暦６年(1756)の生まれで、医術を業とし、72歳で江戸で亡くなっています。

天王院(久喜市本町)に井上清兵衛の墓があり、墓碑に清兵衛の業績等が記されています。

3　井上清兵衛墓

(3) 代官　早川八郎左衛門

4　早川代官銅像
（岡山県久世駅前）

早川八郎左衛門（1739－1808）

名は正紀（まさとし）、字は子綱、楽水斎と号しました。幼名は岩之助、後に伊兵衛、さらに八郎左衛門と改めました。

早川代官は、元文４年、江戸に、井上河内守の家臣和田市右衛門直舎の次男として生まれ、その後早川家の宗家を相続し、幕府の直参となりました。

天明元年、43歳のとき、出羽国（山形県）尾花沢詰の代官となり、天明７年には、美作国（岡山県）久世（みまさか　くせ）の代官に転じ、備中国（岡山県）笠岡の代官も兼ねました。

この地で14年間代官として、大いに治績をあげ、典学館、敬業館の両郷学を設立しています。

享和元年に武蔵国久喜へ転任となり、同３年に遷善館を設立しました。文化５年、70歳で江戸に没しました。

早川八郎左衛門は、竹垣三右衛門直温（なおひろ）、岡田清助恕（はかる）とともに寛政の三代官と称されています。

早 川 代 官 関 連 年 表

年	代	出　　来　　事
1739	元文４	井上河内守家臣和田市右衛門直舎の次男として生まれる。 のちに、早川伊兵衛正諶（まさのぶ）の養子となる。
1766	明和３	早川正與（まさとも）の遺跡を相続、幕府直参となる。
1769	明和６	勘定方となる。
1775	安永４	関東諸国の河川の普請の功により、時服２領、黄金２枚賜る。
1781	天明元	初めての代官となる。出羽国尾花沢詰　５万石　43歳
1787	天明７	美作国久世の代官（備中国笠岡の代官も兼任）となる。 ７万石を支配する。
1795	寛政７	久世に典学館を創設する。
1797	寛政９	時服３領、黄金３枚賜る。
1798	寛政10	笠岡に敬業館を創設する。
1799	寛政11	『久世條教』を作る。
1801	享和元	久喜に転任となる。10万石　63歳
1803	享和３	３月　遷善館を設立する。
1808	文化５	江戸で死去。70歳

「久世條教」は早川代官の作で、彼が美作国久世、備中国笠岡の代官として赴任した時、その地が、貧困と間引、人口減少と労働力不足、田畑の荒廃と出稼ぎ、離村など、生産と風俗の荒廃が見られました。そこで早川代官は厳しい禁制とその厳正な執行を行う一方で、教諭や孝子良民の褒賞などの教化政策を併せて用いました。

「久世條教」は、その趣旨をまとめたもので、「勧農桑、敦孝弟、息争訟、尚節倹、完賦税、禁洗子、厚風俗」の７条から成るものです。遷善館の建学の目的が、人倫の道を郷民に徹底させることであったから、「久世條教」に書かれているような人民教化を遷善館でも行っていたと考えられます。

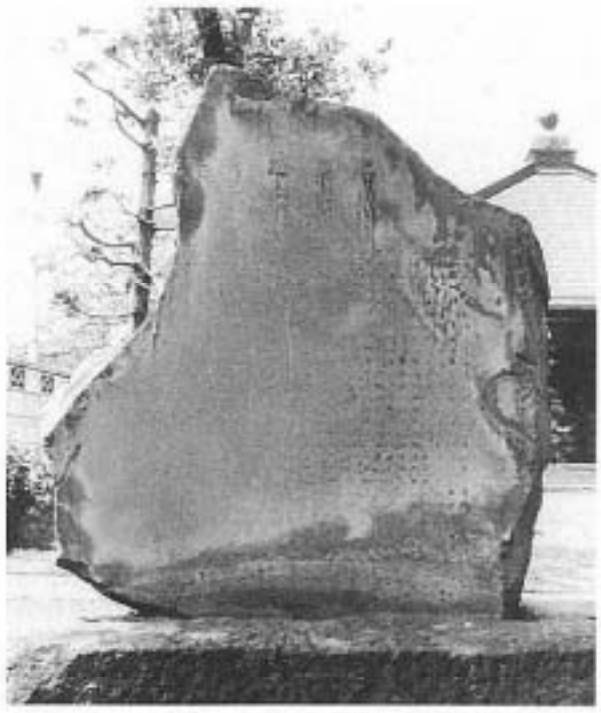
5　久世條教　岡山大学附属図書館所蔵

「六教解」は、明の太祖の六論を例話や詩を交えて一般の人にもわかりやすく解説した「六論衍義(ろくゆえんぎ)」の別名です。早川代官は、この教えを受け入れて村民教化のために活用しました。

内容は、第一孝順父母、第二尊敬長上、第三和睦郷里、第四教訓子孫、第五各安生理、第六毋作非為に分かれています。

「六教解」の本の最後のページに、早川八郎左衛門の署名があります。

7　六教解　　木村達郎家所蔵



9　早川君遺愛碑

多くの治績をのこした早川代官の徳をしのぶため、大経寺(八潮市)に建てられたものです。早川代官の業績が詳しく書かれています。撰文並びに書は、遷善館でも学を講じた久保筑水です。

(4) 新建久喜遷善館記

遷善館に関する資料は非常に少ないが、遷善館建設の事情をもっともよく示すものが、文化5年(1808)に建てられた「新建久喜遷善館記」の碑文です。亀田鵬斎の撰並びに書によるものです。しかし、この碑は、明治11年の久喜町の大火によって失われたといわれ、現在拓本が残るだけです。

10　「新建久喜遷善館記」拓本
田中靖男家所蔵

11　「新建久喜遷善館記」裏面
国立公文書館所蔵
『古址遺跡碑文等の部』より

遷善館記には、

郷学設立についての要望は、すでに米津氏の時代からあり上申されていたが、当時は実現せず、早川代官の着任によってはじめて達成されたこと。

遷善館の設立のため、もっとも多くの財を負担したのは清兵衛であったが、その村の有力者や村民の中にも多数の協力者がいて、村民の支持の大きさを窺うことができること。

等が書かれていました。

遷善館の建学の精神は、遷善館記にあるように、「父父たり、子子たり、兄兄たり、弟弟たり、夫夫たり、婦婦たる」人倫の道を郷民に徹底させようとしたものでした。

「隣里相親しみ相睦み、争闘訟獄の擾なし」といっているのは、早川代官の久世條教の条項と一致するものです。

「斯の館若し存すれば即ち郷民また存すべし、斯の館亡すれば即ち郷民また亡すべし、郷民の命実に斯の館の存亡にかかる」と、遷善館の存亡が久喜郷民の存亡にかかわると述べています。このことからも、遷善館に期待をかける久喜郷の支配階層と早川代官の強い関心が表われています。

裏面に記されている人名は、遷善館に関係した村の有力者ではないかと考えられます。

Ⅱ　遷善館の教育

(1) 遷善館の位置・規模・経営

遷善館の位置については、『新編武蔵風土記稿』に「本町の内にあり」とあるように、もとの久喜本町と推定されていますが、「新建久喜遷善館記」の碑も明治11年(1876)の大火で所在不明のため、詳細はわかっておりません。古老の伝承によりますと、久喜市中央４丁目あたりであろうといわれています。

館の敷地と建物についても資料がなく不明ですが、200余人を容れるに足るものであったと伝えられています。当然、早川代官の前任地の典学館・敬業館に範をとったとみられ、かなり立派なものであったと想像することができます。

早川代官は遷善館の允許を幕府に求めたところ、これに対して幕府は允許を与えるとともに、別に一地区を下賜し、この地区の年貢及び徭役(ようえき)を免除して、遷善館を恒久的教育施設として存続しうるよう取り計らっています。恐らく早川代官が遷善館の運営のために附加したものと思われます。早川代官が、遷善館の経営のため、相当積極的に援助をしたと考えられます。

(2) 遷善館の教育活動

12　遷善館規則
榎本善之助家所蔵

「遷善館規則」によると、経書の講釈始は、毎年正月21日で、昼九ツ時(正午)からとなっており、毎月１と６の日が経書の講釈日で、同じく昼九ツ時より始められています。

教諭始は、毎年正月25日で、暮六ツ時(午後６時)からとなっており、毎月の教諭日は、大人に対しては５日と25日、15歳以下の男女に対しては15日でした。

また、遷善館の教諭日、講義内容とともに、村役人、世話人の役割を記しています。それによりますと、出席の督励、聴衆の整理など子弟の世話役をつとめていることがわかります。

遷善館では、館に集まる人々の教諭だけではなく、教官を管内の村々に派遣して、民衆を教諭したり経書の講釈を行ったりしていました。遷善館には書籍も相当冊数所蔵されていて、一部便宜貸出も行われていました。

「弥堅（いよいよかたし）」という言葉の意味は、「論語・子罕（しかん）」の「鑽之弥堅（これをつらぬけばいよいよかたい）」よりひかれたものだと考えられています。

13　扁額「弥堅」　宮本弘毅家所蔵

下野の書家平稜松芳の筆によるもので、「文化甲子五歳七月書」とあり、遷善館の講堂の大広間に揚げられていたものと推定されています。

額の裏面には、８人の氏名が記されています。いずれも遷善館創設に寄与した有力者とみられます。

岩槻藩の児玉南柯が、文化２年(1805) ２月２日の日記に、久喜の遷善館を訪れ教授生稲川静斎に会い、甘棠院で昼食をとったことが記されています。当時の遷善館が建学当初でもあり、教育活動が活発に行われていたものと考えられます。

14　児玉南柯の日記
埼玉県立文書館保管
児玉南柯文書８

児玉南柯（1746～1830）

岩槻藩士

寛政11年(1799)私塾（せんきょう）遷喬館を創建（文化年間に藩校として献納）、また、郷学戢穀堂を主宰して庶民の教育にも力を尽くしました。安永９年(1780)から文政２年(1819)の39年間にわたり日記をつけていました。

15　遷善館帳面糺方一件
榎本善之助家所蔵

遷善館の教育活動がいつごろまで存続していたかについては、文政９年(1826) ２月のこの資料が、遷善館の名前の出てくる最後の資料で、これ以後いつまで存続していたかは不明です。

(3) 教授者　亀田鵬斎

16　亀田鵬斎肖像画
寺井政美家所蔵

亀田鵬斎（1752～1826）

江戸時代の儒学者

初名は「翼」、後に「長興（ちょうこう）」とし、字は「穉竜（ちりゅう）」といいます。通称は、「文左衛門」を用い、「鵬斎」は号です。その他、「善身堂」という別号も用いていました。

儒者井上金峨に学び、私塾を開き多くの門人を擁しました。鵬斎は折衷学派であり、朱子学ではなかったので、幕府の寛政異学の禁で弾圧されました。早川代官が、久喜に遷善館を設立すると、教授として招かれ、講義を行いました。

鵬斎は、儒学者であるとともに、絵も巧みでさらに豪快な書風は人々に愛好されました。

亀田鵬斎関連年表

年	代	出来事
1752	宝暦2	江戸神田で生まれる。一説には上五箇村（群馬県千代田町）
1765	明和2	このころ、儒者井上金峨について経書を学ぶ。
1774	安永3	赤坂山王社の傍らで家塾を開く。
1785	天明5	家塾を駿河台に移して、「育英堂」と名づける。
1790	寛政2	寛政異学の禁が発せられる。
1803	享和3	遷善館に教授として招かれる。
1808	文化5	「新建久喜遷善館記」を撰す。
1826	文政9	75歳で死去。

(4) 亀田鵬斎と早川代官

亀田鵬斎が遷善館に招かれた点につきましては、早川代官といかなる関係にあったか資料が少なく詳しく知ることはできません。八潮市の大経寺にある「早川君遺愛碑」の文中に「君、鵬斎をして之に教諭せしむ」とあります。また、中島撫山の子中島竦の『増訂亀田三先生伝実私記』には、鵬斎と早川代官との間に早くから何らかの交誼があったので、遷善館の教授に招かれたと記してあります。しかし、その根拠となる資料はありません。

(5) 亀田鵬斎と久喜

亀田鵬斎がどのくらい久喜に来たのかも直接それを示す資料がなく不明ですが、中島竦著の「佐渡と亀田鵬斎先生」の中に、「地方に門人が殖えて来た者であるから、時々講演に出掛けられた。其内最も屢々行かれたのが代官早川八郎左衛門支配の武蔵国久喜町の遷善館であった。」とあり、また、文化８年(1811)には、「此年遷善館の聖堂出来、先生を迎えて祝宴を張り、此処に滞留すること二、三ヶ月」とあり、遷善館へたびたび来ていること、文化８年には滞留していることが記してあります。

21　扁額「黄梁舎」田中靖男家所蔵

久喜市域に江戸時代の大儒者が来て人々に学を講じたことは、市域に大きな文化的影響を与えたものと考えられます。現在、久喜市域にのこる鵬斎の作品には右の扁額のほかに、軸物が数点、碑文としては、「新建久喜遷善館記」の拓本、「知道軒戸賀崎氏衣幘蔵碑銘」（これは鵬斎の子の綾瀬の作という説も）などがあります。

24　亀田鵬斎墓

亀田鵬斎は、文政９年(1826) ３月９日に下谷金杉村(現東京都台東区)の家にて没し、浅草今戸(現東京都台東区)の称福寺に葬られました。享年、75歳でした。

(6) その他の教授者

遷善館に関係した儒者は、亀田鵬斎のほかにも、鵬斎の子綾瀬（りょうらい）、大田金城（きんじょう）、久保筑水（ちくすい）などでした。

亀田綾瀬　安永７年（1778）～嘉永６年（1853）
鵬斎の子、44歳の時、関宿藩の儒官となる。

大田金城　明和２年（1765）～文政８年（1825）
加賀出身、京都の皆川湛園（きえん）、江戸の山本北山に学ぶ。

久保筑水　宝暦９年（1759）～天保６年（1835）
信濃出身、安芸の菅野兼山に学ぶ。

Ⅲ　遷善館のその後

(1) 早川代官死後の遷善館

遷善館がいつまで続いたのかについては、文政９年(1826)２月の「遷善館帳面糺方一件」が、遷善館の名前が出てくる最後の資料です。これ以後いつまで存続していたかについては定かでありません。

早川代官は、文化５年(1808)に他界しており、久喜本町も文化８年(1811)に、村高の半分を旗本島田玄蕃に、文政７年(1824)には、残りの半分も清水家の領地となりました。郷学推進者の早川代官を失い、支配者も変遷したことから、積極的に遷善館護持に意欲を燃やしたかについては疑問があります。遷善館の直接の資料が少ないのは、このような事情も関係があるようです。

(2) 市内に残る遷善館関係の碑

27　久喜学校開校の碑

「久喜学校開校の碑」の裏面には、明治新学制の理想と、郷学「遷善館」の遺風を受け継ぎ、この光明寺を仮校舎として、明治６年１月の「久喜学校」の開校に始まった。とあります。

29　「新建久喜遷善館記」の石碑(復刻)

久喜小学校、本町小学校、久喜中学校の校歌の歌詞の中に、「遷善館」の文字が見られます。

28　久喜小学校校歌の碑

郷土の誇りである遷善館を、後世に伝えるために、「新建久喜遷善館記」の拓本をもとにして、公文書館の前庭に、平成８年11月新建久喜遷善館記の碑が復刻されました。

展 示 資 料 一 覧

Ⅰ 遷善館の設立		15	遷善館帳面糺方一件
1	扁額「遷善館」	16	写真パネル　亀田鵬斎肖像画
2	写真パネル　『新編武蔵風土記稿』	17	鵬斎先生詩鈔
3	写真パネル　井上清兵衛墓	18	候鯖一臠
4	写真パネル　早川代官銅像	19	善身堂一家言
5	写真パネル　「久世條教」	20	鵬先生序跋帖
6	写真パネル　「御教諭書幷御触書写」	21	写真パネル　「黄粱舎」
7	六教解	22	写真パネル　知道軒戸賀崎氏衣幘蔵碑
8	御林内畑五畝拾八歩三木改帳	23	鵬斎遺闕附綾瀬遺闕
9	写真パネル　早川君遺愛碑	24	写真パネル　亀田鵬斎墓
10	「新建久喜遷善館記」拓本（軸）	25	亀田三先生伝実私記
11	写真パネル　「新建久喜遷善館記」裏面	26	亀田鵬斎先生伝
Ⅱ 遷善館の教育		**Ⅲ 遷善館のその後**	
12	遷善館規則	27	写真パネル　久喜学校開校の碑
13	扁額「弥堅」	28	写真パネル　久喜小学校校歌の碑
14	児玉南柯日記	29	写真パネル　「新建久喜遷善館記」の石碑（復刻）

協力者（敬称略・順不同）

榎本善之助、木村達郎、田中靖男、寺井政美、戸賀崎恵太郎、中島元夫、宮本弘毅、
光明寺、天王院、大経寺、称福寺、岩槻市教育委員会、岡山大学附属図書館、久喜小学校、
国立公文書館、埼玉県立文書館

公文書館利用案内

- 開館時間　9：00 ～ 17：00
- 休 館 日　土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始
  （企画展の期間中は、日曜日も観覧できます。）
- 交通案内　JR 宇都宮線・東武伊勢崎線
  久喜駅西口下車徒歩 17 分（市役所西側）

発行：平成 11 年 8 月　編集：久喜市公文書館 〒346-8501 久喜市下早見85-1　☎0480-23-5010

この図録は再生紙を使用しています。